日本の植物との出会い

開国後、続々と押し寄せたプラントハンター

日本の開港と蒸気船航路の開設

1859 年を境に、西欧諸国からプラントハンターが相次いで日本を訪れるようになりました。その理由には、江戸幕府が長崎・神奈川・箱館の３港を開港したことだけではなく、ちょうどその頃イギリスからスエズ地峡の陸路を経由して日本に至る蒸気船による定期航路が完成し、旅客の移動が格段に容易になったことがあげられます。

中国で実績をあげた フォーチュンの来日

ロバート・フォーチュン（1812-1880）は、アヘン戦争後の 1843 年から 1861 年にかけてくり返し中国を訪れ、外国人の移動が制限されるなか、中国人に変装するなど危険をかえりみず内陸部に潜入して多数の園芸植物を収集しました。フォーチュンは植物の輸送にウォードの箱を愛用し、1846 年の最初の発送で 250 種のうち航海中に枯らしたのはわずかに 35 種という実績（成功率 86%）を残しています。

秋・春の２度来日し園芸植物を収集

日本の開港を知ったフォーチュンは、まず 1860 年 10 月から 12 月にかけて訪日し、長崎・神奈川・江戸などで園芸植物を収集しました。江戸に滞在中、フォーチュンは団子坂・王子・染井などにあった植木屋を訪ねました。折しも盛りを迎えたキクなどを観賞し、斑入り植物の多様性に目をうばわれ、日本の園芸文化が独自の発展を遂げていることに驚いています。

染井の植木村を巡るうち、フォーチュンはアロエ、フクシアなどの外国産の園芸植物を発見しました。それらは当時の中国では見られなかったもので、日本人の新奇な植物を求める嗜好に驚いています。

この滞在中に収集した植物は、ウォードの箱に収納して 12 月末に上海に運び、イギリスへの発送手配を自ら行いました。

フォーチュンは、あくる 1861 年の４月から７月にかけて再度来日し、江戸・神奈川などでウメ・サクラ・ツツジ・フジ・サクラソウなどの春の花を楽しみ、多くの植木屋を訪ねて精力的に園芸植物を収集しました。

この滞在中に収集した植物は前回と同様ウォードの箱に入れて上海に運び、フォーチュンとともに 1862 年１月にイギリスに到着しました。

フォーチュンは、日本の園芸植物を輸送するに当たって細心の注意を払い、コレクションを二等分して２つの船に載せ、どちらかの船に事故があった場合に備えました。特に大切と感じたユキノシタなど数種類の植物は、手提げ型のウォードの箱に入れて持ち歩き、寄港地のセイロンやスエズでも常に手元に置いて手入れを怠りませんでした。

イギリスに持ち帰った植物の大半は無事生き残っており、イギリスの園芸商スタンディッシュ・アンド・ノーブル商会によって増殖・販売され、瞬く間に西欧全域に普及しました。

上図：コウヤマキ「ヨーロッパの温室と庭園の植物」より（Flore des Serres et des Jardins de l'Europe. v.14,1861 年）（Biodiversity Heritage Library）
右図：フォーチュン画「豊顕寺のコウヤマキ」（フォーチュン著 / 三宅馨訳「幕末日本探訪記江戸と北京」講談社学術文庫、1997 年、P.67 より）

上図：イチハツ「ヨーロッパの温室と庭園の植物」より（Flore des Serres et des Jardins de l'Europe. v.22,1877 年）（Biodiversity Heritage Library）
左図：フォーチュン画「屋根にイチハツの生えた農家」（フォーチュン著 / 三宅馨訳「幕末日本探訪記 江戸と北京」講談社学術文庫、1997 年、P.75 より）

イギリス有数の園芸商の御曹司

ジョン・グールド・ヴィーチ（1839-1870）は、イギリス有数の園芸商ヴィーチ商会の設立者であるジョン・ヴィーチ（1752-1839）のひ孫にあたり、1860 年の７月に長崎を訪れ、植物の収集を行った後、８月末に横浜に向かいました。

横浜では、初代駐日総領事・同公使を務めていたラザフォード・オールコック（1809-1897）に誘われ、「江戸英国公使館付植物学者」に任命されて、西洋人では初めての富士登山に同行し、山麓で針葉樹などを収集しました。その後、短期に箱館を訪れ、江戸に戻るとイギリス公使館があった高輪・東禅寺に宿泊しつつ植物の収集を行いました。日本で収集した植物をウォードの箱に納め、フォーチュンと同じ 1860 年 12 月の船便に乗船して日本を離れました。

ヴィーチが持ち帰った日本の植物には、ヤマユリ、シデコブシ、カラマツ、サラサモクレン、クリンソウ、サクラソウなどがあり、ヴィーチ商会で増殖・販売が行われました。

上図：シデコブシ（日本固有種）（The Gardeners' Chronicle. May 17, 1890 年）（Biodiversity Heritage Library）

上図：アーノルド樹木園のサクラ（1930 ～ 45 年頃）（Pond and Japan-ese Cherry Trees, Arnold Arboretum）（Wikimedia public domain）

針葉樹を求め陸路北海道をめざす

チャールズ・マリーズ（1851-1902）は、ヴィーチ商会から派遣されて 1877 年２月にイギリスを発ち、中国で植物を収集した後、４月中旬に日本を訪れました。

長崎から神戸・大阪を経て横浜・東京に向かいました。神戸では白花のツツジやザイフリボクを収集し、大阪では池田の植木村を訪れ、ボタンの栽培技術が高いことに驚いています。東京では大名庭園などを訪問し、ハナショウブやシホウチクを収集しました。

マリーズは北海道の針葉樹を収集したいと考えましたが、当時は西南戦争（1877 年）のさなかで函館（開拓使により 1869 年に「箱館」を「函館」と改称）に向かう船便がなかったため、牛馬に荷物を積んで約 800km の陸路を進むことにし、５月下旬に東京を出発しました。オオシラビソやトドマツの種子を手に入れつつ、約２週間で青森港に到着しました。函館に上陸後は、札幌から十勝にかけての沿岸地方を巡り、アカトドマツやシラビソなどの針葉樹の他、キキョウの変種やショウジョウバカマなどを収集しました。年末には海路を使って函館から新潟に至り、そこから陸路で横浜に戻りました。1878 年１月には香港経由で台湾に渡り、タカサゴユリなどを収集しています。

上図：シラビソ（日本固有種）（The Gardeners' Chronicle. Feb 28, 1880 年）（Biodiversity Heritage Library）

サクラとツツジをコレクション

アーネスト・ヘンリー・ウィルソン（1876-1930）は、1899 年から 1910 年までに、ヴィーチ商会やアメリカのアーノルド樹木園から依頼されてくり返し中国を訪れ、リーガル・リリーをはじめとする多数の植物を収集しました。

1914 年にはアーノルド樹木園の初代園長チャールズ・スプレイグ・サージェント（1841-1927）の依頼を受けて日本を訪れ、東京・横浜などでサクラの園芸品種の収集を行いました。

その際、東京幡ヶ谷の植木屋でみつけたクルメツツジを持ち帰ったところ、1915 年にサンフランシスコで開催された「パナマ・太平洋博」に出品されてたいへんな評判を呼びました。

ウィルソンは 1918 年に日本を再訪し、久留米の赤司喜次郎（あかしきじろう）（1842-1920）を訪ね、250 種以上に及ぶクルメツツジのコレクションから 50 種を厳選して持ち帰りました。